

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
（地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業）

成果報告書

団 体 名	公益財団法人ニッセイ文化振興財団	
施 設 名	日生劇場	
助成対象活動名	公演事業	
内 定 額（総額）	28,297	（千円）
公 演 事 業	28,297	（千円）
人材養成事業		（千円）
普及啓発事業		（千円）

(2) 平成30年度実施事業一覧

【公演事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概 要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場			
1	ニッセイ名作シリーズ2018 バレエ「くるみ割り人形」	2018年7月9日～13日	バレエ「くるみ割り人形」全2幕 出演：バレエシャンブルウエスト 指揮：末廣誠 演奏：東京ニューシティ管弦楽団	目標値	4,940名
		日生劇場		実績値	5,347名
2	日生劇場ファミリーフェス ティヴァル2018 ダンス×人形劇 「エリサと 白鳥の王子たち」	2018年7月28日、29日	出演：辻田暁、鈴木ほのか、人形劇団ひと み座 他 脚本：長田育恵、演出：扇田拓也 振付：広崎うらん 他	目標値	3,930名
		日生劇場		実績値	2,901名
3	日生劇場ファミリーフェス ティヴァル2018 物語付きクラシックコンサート 「アラジンと魔法のラン プ」	2018年8月4日、5日	出演：工藤広夢、与那城敬、三宅理恵、宮 谷理香、加藤昌則 他 指揮：大井剛史 演奏：新日本フィルハーモニー交響楽団	目標値	3,990名
		日生劇場		実績値	4,786名
4	日生劇場ファミリーフェス ティヴァル2018 家族で楽しむ日本の伝統芸能 「ニッセイ親子歌舞伎」	2018年8月10日～12日	演目：太刀盗人、藤娘 他 出演：片岡孝太郎、坂東彦三郎、坂東亀蔵 他	目標値	4,990名
		日生劇場		実績値	3,595名
5	日生劇場ファミリーフェス ティヴァル2018 バレエ「ドラゴンクエスト」	2018年8月24日～26日	バレエ「ドラゴンクエスト」全2幕 出演：スターダンサーズ・バレエ団 指揮：田中良和 演奏：テアトロ・ジーリオ・ショウワ・ オーケストラ	目標値	5,920名
		日生劇場		実績値	4,807名
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	23,770名
				実績値	21,436名

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

本事業は、日生劇場がミッションに掲げる三つの理念のうち、特に「育む」（良質な舞台芸術の提供を通じ、児童・青少年の豊かな情操を育む）、「届ける」（質の高い作品を企画・制作し、より多くの人に届ける）の二つに基づいた事業です。

当劇場は開場当初より、児童・生徒を対象に各種事業を展開してきた「子どものための劇場」でもあります。本事業でもニッセイ名作シリーズのバレエ公演に約5,350名の生徒を招待したほか、日生劇場ファミリーフェスティバルの4公演では約5,950名の子ども（3歳～中学3年生）が来場しました。また本事業で制作した2演目はその後各地を巡回、9都市で約12,000名の児童を招待し、3都市では有料公演として実施されるなど、コンテンツ提供による劇場ネットワーク構築にも寄与しました。

よって本事業は、「育む」「届ける」という当劇場の理念を具現化するものとして、概ね当初予定通り実施出来たと考えます。



助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

本事業では2演目のオリジナル作品を企画・制作しました。これらは当劇場での上演に加え、前述のとおり各地で新しい文化芸術の創造・発信を行っています。

日生劇場ファミリーフェスティバルは、小さな子どもから大人まで、家族そろって本格的な舞台芸術が楽しめる公演事業として、1993年以来毎年開催、これまで約37万名に来場いただいております。これは自治体、教育委員会、各地の教育機関等の後援のもと、幼稚園、学校等にご協力を得て事業周知を行ってきた結果であり、本事業の社会的意義が連綿と認められている証左であると考えます。

他方、子ども向けに低廉ないしは無料で本格的な公演の鑑賞機会を提供する本事業は、常に経済的な難しさに直面しています。関連コスト削減と入場率向上による収益率の持続的な改善に努める中、廉価な価格で上質な舞台芸術を提供するという相反する課題を解決し、「子どものための劇場」としての期待に引き続き応えて参ります。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

本事業はその趣旨からも、学校等への情報発信強化を目標に掲げています。特に有料公演は一都三県を中心に、多くの学校で在籍者全員へのチラシ配布に協力いただきました。これは自治体、教育委員会、教育機関等から広く後援を得るなど、教育関係者に事業意義が評価されていることの証左であり、情報発信の強化は本事業の発展存続に重要と考えています。

よって本事業は学校等へのチラシ配布数を指標の一つとし、今回は5,200校へ送付しました。特に幼稚園・小学校への送付は約4,800校に及び、当劇場のアクセス圏（概ね50km圏）内の約8割をカバーしました。配布枚数は、各送付先にニーズ調査を実施、その要望に応えながら決定したため、最終的に若干の目標未達となりましたが、公演情報を広く発信するとともに、チラシ配布を通じたチケット購入率を引き上げる観点から、今後も送付先の拡充と効率的な配布（枚数）に努め、コストの適正化を図りながら継続していきます。

入場者数等の目標は招待公演で上回った一方、有料公演では下回りました。前者は受入可能な範囲内で応募校の鑑賞日を調整、人数の最大化に努めました。後者は主にお盆休みと重なった歌舞伎の公演日程、現代作品を取り上げたバレエの上演演目のためと考えています。歌舞伎は、伝統芸能の代表格としての意義を重視して上演しました。またこれまで古典中心だったバレエでは観客層の拡大と上演作品の多様性確保のため、日本発の現代作品を取り上げました。両演目ともその目的は達したものの、目標には届きませんでした。今後はジャンルや日程等を踏まえた収入面の予測精度とコスト管理の正確性向上に努めていきます。

また公演満足度については、観客アンケート集計結果から所期の目標を達成出来ました。各公演終了後には、栗國芸術参与、当劇場常勤役員を含む全幹部職員及び全制作担当職員による評価会で、各演目の課題共有と解決策の検討を行っています。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

本事業の事業期間について、ニッセイ名作シリーズのバレエ公演においては、招待対象となる中学校、高等学校の定期考査時期と劇場スケジュールとの兼ね合いで、例年通り7月上旬の実施となりました。これには定員を超えて応募いただいたことから、時期として適切であったと考えています。ファミリーフェスティバル公演においては、事業趣旨からも夏休み時期での上演が不可欠であり、その計画通り実施しました。各演目の公演関係者と調整の結果、3演目目の歌舞伎がお盆直前の実施となり、前述のとおり入場者数の目標未達の要因となったことは、今後の課題として認識しています。

本事業の事業費においては、助成対象経費における総支出額としては申請時から1.3%の支出減となりましたが、収入額は同じく12.3%の減となっており、課題を残す結果となりました。収入額の減少は、4演目中3演目において、入場者数が目標に届かず入場料収入が申請時見込みから減少したことによるものです。人形劇とダンスのコラボレーションに挑戦した「エリサと白鳥の王子たち」は、新しい上演形態の分かりにくさが購入動機を押し下げたこと、また歌舞伎公演はお盆時期の公演日程、バレエ「ドラゴンクエスト」は古典バレエファンへの浸透不足が主たる要因で、それぞれ入場者数が目標に届かなかったと考えております。今後も引き続き、各種広報・営業活動の充実で入場料収入の上積みに努めるとともに、入場者目標の適切な設定により収入見込の正確性向上を図ってまいります。

支出の内訳でも、これまで経験のないジャンルへの挑戦となった一部演目で、制作の進捗に伴い出演費、音楽費、文芸費、舞台費、運搬費等が全体的に増加、助成対象経費における支出額が申請時から増加しました。新制作演目は特にクリエイションの現場で追加支出が生じやすいため、ゆとりをもった収支予算の設計とともに、事業全体での支出コントロールにも努めていきます。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当劇場は開場当初より半世紀以上、児童・青少年の豊かな情操や多様な価値観を育むため、質の高い舞台芸術を届ける事業を続けてきました。ここまで継続してこられたのも、お客様、関係者、行政・支援団体、設置者（親会社）等、広範の方々のご支援によるものです。この支えこそ、当劇場の文化拠点としての最も大切な財産であると考えています。

当劇場はオペラやコンサート、演劇等で自主制作での上演を行っており、専門の企画・制作職員が複数在籍しています。2017年12月からは新たにオペラ演出家の栗國淳が芸術参与に就任、これら自主制作公演を含めた主催公演のラインアップ決定に参画しているほか、各演目の制作にも積極的にかかわり、その芸術性を担保しています。本事業においては、更に1演目に演出家としても関わりました。

さて、そのような中において本事業では5演目中2演目が創作初演で、且つ当劇場での公演後に全国各地で巡回上演をしました。

一つ目の「アラジンと魔法のランプ」は演劇とクラシックコンサートを融合したオリジナル形態のコンサートです。早くからクラシック音楽に触れてもらいたいという思いから、子どもたちに馴染みのあるキャラクターによる物語進行の中で曲を聴かせる工夫を行っています。今回から、11年間継続してきた「不思議の国のアリス」シリーズを一新、「アラジン」をモチーフに新シリーズを立ち上げました。演出の栗國をはじめ、監修に上岡敏之、作曲・編曲に加藤昌則、出演に与那城敬など、一流のスタッフ・出演者が集まり、日生劇場での公演は早々に完売となりました。

二つ目の「エリサと白鳥の王子たち」は、主人公の軽やかな動きと白鳥の躍動感をコンテンポラリーダンスで表現し、アンデルセン童話のファンタジー世界は人形を使う、異分野を掛け合せた新しい舞台表現の創造に取り組みました。脚本に長田育恵（てがみ座）、演出に扇田拓也、振付に広崎うらんとトップクリエイターが参画しました。

その他の演目についても、前述のとおり学校招待公演として実施したバレエ「くるみ割り人形」では、バレエ公演としては異例の解説字幕付き上演を実施、バレエ鑑賞に馴染みのない生徒や教員からも、高い評価を得ています。歌舞伎公演でも多数の方が初めての鑑賞になることから、子ども向けに歌舞伎の楽しみ方を説明する解説を実施しました。全体の85%が利用したイヤホンガイドの無料貸し出しとあわせて、内容理解の一助になったものと考えています。



【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

本事業の実施によって得られた直接的効果として、まずは来場者を中心に、当劇場が児童・青少年のために質の高い舞台芸術を制作・提供している劇場であると発信できたことが挙げられます。アンケートによって捕捉している来場者の公演満足度等を参考にした判断ですが、来場者に加え、親会社等のステークホルダーの期待にも十分応えることができたと考えています。また、隣接商業施設を中心とする日比谷地域をあげた観劇フェスティバルにおいて本事業のミニコンサートを行うなど、地域一体での盛り上がり醸成にも努めました。

また、本事業ではHPやSNSを活用した公演情報の周知を行っております。今後は公演情報のみならず、公演に付随実施している関連イベントの情報を含め、当劇場の取り組みを広範に発信できるよう、自主媒体に加え、マスメディア等の活用を図っていきます。

最後に本事業において制作された2演目は、前述のとおり全国を巡回、招待公演として多くの児童が鑑賞したほか、「アラジンと魔法のランプ」は、一般有料公演として兵庫、愛知、熊本の各劇場で上演しました。当劇場が掲げる「届ける」劇場としてのビジョンに基づき、日生劇場で生まれた作品を各地の劇場で上演する取り組みは、子ども向けコンテンツの充実という各地共通の課題（地域のニーズ）に対する、当劇場の資源を活用した応答であり、今後も継続していく所存です。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

当劇場の舞台芸術事業は、大きくは①本事業（今回の助成対象事業）、②オペラ公演の企画・制作・上演（年2作品、各一般有料公演と中高生の無料招待公演）、③各地の劇場に自主制作作品を巡回上演する全国公演、の3種類に系統立てられます。当劇場の社会的役割を果たすため、各事業は相互に補完し合う関係にあり、本事業の成否、並びに持続性はその作品を各地に巡回上演する③の事業にも直結するものです。従って、本事業の実施が、単に翌年度以降の本事業の改善のみならず、②や③、ひいては当劇場組織全体の持続的発展の重要な要素ともなっています。

本事業を含むすべての主催公演の企画・制作においては、制作過程を適切に管理する専任のアートマネジメント人材が、またその上演にあたっては舞台技術、劇場運営の専門人材が不可欠です。また、上記③事業では、各地の劇場からの要望を踏まえた効率的な上演計画の策定・実施とともに、コスト管理等を行う専任職員を配置し、上記の通り相互に補完し合う当劇場の舞台芸術事業の持続性を担保すべく組織体制を整えています。これらの専任人材の大半は期間の定めのない正規雇用職員であり、それら職員の長期的視点での人材確保、育成には本事業の実施、持続性が不可欠となっております。

事業費の面では、設置者である親会社からの寄付金・協賛金、各種補助金・助成金の収入に加え、本事業（1のニッセイ名作シリーズを除く）からの入場料収入が大きな収入源となっており、そのいずれが欠けても当劇場の組織活動は持続出来ません。逆に言えば、本事業による収入源の存在ゆえに、寄附金・協賛金等も獲得出来ており、本事業はまさに当劇場の組織活動全体の持続性に不可欠な事業と言えます。

上記の通り、本事業を通じて、人材面、財務面での体制整備を図り、また体制を通じて本事業（＝当劇場の組織活動）の持続性が担保されるという、プラスの連鎖を作り上げています。